奈良山通信

第27号

昨年7月の西日本豪雨から一年経ちましたが、被災地の復旧作業はいまだに終わっていません。一日でも早く平穏な日常生活が戻ることを願っています。

さて、毎月の山下組合長によるお墓セミナーですが、この秋特別セミナーを9月から3ヶ月間開催します。

最近は後継ぎが居なくて墓守り（墓を守る人）の居ない家が増えてきました。「墓じまいをして永代供養塔や樹木葬へ移行したい」とのご相談・お問合せが数多く寄せられます。その様な方に、とっても為になるお話です。

石屋社長のお墓セミナー！

参加費 無料

テーマ：『墓じまい』・・・を考えているあなたへ！！

日時：9/12(木)、10/10(木)、11/14(木)
時間：10：00～11：00（講和タイム）
　　11：00～12：00（質問をお受け致します）
場所：奈良山霊苑管理事務所 2階
講師：奈良山霊苑管理組合長 ㈱山下石材 山下武久

速報 ご好評につき第三期樹木葬の増設を予定しています！
新霊域は区画にシンボルを置きたい方のご要望にお答えします！

毎月第四土曜日 説明会開催！

時間/①10時～ ②14時～

ケース①　鬼北町在住Oさんの場合

Q 子供が独身で、先祖代々のお墓をどうすればいいのか悩んでいます・・・

A 将来が心配でしょうから、現在のお墓を墓じまいして永代供養をされたらどうですか？

ケース②　宇和島市在住 Mさんの場合

Q 親が亡くなり、埋葬方法を親族で話し合う間、お骨をどうすればいいのか悩んでいます・・・

A ご親族様での話合いの間、奈良山霊苑でお預かりすることが出来ます。

それぞれにご提案させて頂くと、皆様安心されたご様子でした

事前にご連絡ください。個別相談も承ります。

～お盆・墓所用品～

◆ほうろく皿

◆線香立て

◆湯呑

※暑い時期には樹脂製がおススメ！

◆各種花筒

知って役立つ 専門用語特集 No.2

合祀（ごうし）
大切な方のご遺体を合同で埋葬し、祀ること。
当苑では、四期に立つ永代供養塔にご遺体を納め、永代に亘り供養し、大切にお守りすることをお約束します。

永代供養塔（えいだいくようとう）
永代に亘り供養していく為のシンボル。
当苑の供養塔は「六角宝篋印塔（ろっかくほうきょういんとう）」です。
「一切如来心秘密全身舎利寶篋印陀羅尼」（というお経）を納経していることにより、大きな功徳が得られ、永年に亘り塔を見る人やその場所を守り続けます。
実際にその前に立ってみると、圧倒的な存在感とパワーを感じます！

桜満開の法要祭当日は寒さに震えましたがお陰様で無事に終えることができました。
遠方で来れない方、都合が悪くて来れなかった方、次回は来ようと思っている方等へ、当日の様子をお伝えします♪

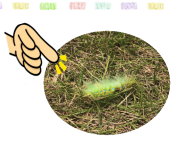
樹木葬霊域の法要

何を作ろうか、どれにしようか迷っちゃった～

道具で叩くの難しいかった

霊苑に響き渡る太鼓の音♪

霊苑掃除で見つけました！
ふわふわした黄緑のもの・・・
拾い上げようとした瞬間、
えっ・・・毛虫！？



すぐさま調べると、クスサン という蛾の幼虫だったみたい。毛虫ですが、毒は無いようですのでご安心を。驚いたのはその別名、シラガタロウ。なんともかわいらしいネーミングです。

クスサン

命のつながり
～千人の先祖を思う～

私たちは誰でも等しく命のつながりの中に存在しています。

両親からいただいた命の元を辿（たど）れば、祖父母がいて曾父母がいて、さらに先代から続く歴史があって、今の自分がいます。

自分にいったいどれくらいの先祖がいるのか計算してみましょう。両親二人を一世代前と考えると、二世代前で四人、三世代前で八人・・・十世代を遡（さかのぼ）ると一〇二四人となります。

一世代を三十年と仮定すると、およそ三百年前に、千人もの先祖がいることになります。多くの命が、年月をかけて、バトンリレーのようにつながれてきたことを思うと、今の自分と先祖を分けて考えることはできないでしょう。（職場の教養より抜粋）

ある月のお墓セミナーで、“私”が産まれるまでにいったい何人の先祖がいたんだろう、という話題になりました。世代を遡り人数を計算していて十世代前の人数の多さにビックリ！

今ここに私が存在しているのも先祖や両親からつながれてきた「命」のお蔭。誰か一人でも欠けていたら私はいない。

私から子供・孫へと続く命の重さを想うと自然と感謝の気持ちがわいてくる。ありがとう。（合掌）

発行元：奈良山霊苑管理事務所
〒798-1351
愛媛県北宇和郡鬼北町奈良4230-1
電話番号　0895-45-0164
http://narayama-reien.jp
営業時間　9：00～17：00
定休日　日曜・祝祭日

発行年月日:令和元年7月吉日　第27号

事務のコラム

人は誰しも自分が生まれる国や親、性別等選ぶことは出来ません。
戦争の絶えない国や、虐待する親、不自由な体を望んで生まれてくる人はいないだろうし、逆に裕福な家庭や天才的な頭脳を望んでもそうなるとは限りません。
全ての人は生まれた時に与えられた環境を受け入れ人生を送ることになります。
では、自分が人生の最後を迎える時はどうだろうか。
もちろん、不慮の事故や突然死の場合もあるだろうが、多数の人はある程度の年齢を重ねて亡くなっていく。

最近、友人知人家族の葬儀に参列する機会が度々あった。葬儀では最初、スクリーンに故人の人生の歩みが映し出される。祭壇には親族や交流のあった方々からの献花や弔旗が供えられ、最後に喪主の挨拶を聞きながら故人がいかに周囲から必要とされ愛されていたか知ることとなる。
そんな時、私はいつも自分はいつどんな死に方をするのだろうかと考えてしまう。

日々進歩している医療技術により人間の寿命は過去100年で飛躍的に伸びた。
今や100才を越えた元気なお年寄りなんてそう珍しくもないが、400年以上前織田信長は「人生50年」と言い、更に300年遡って徒然草を書いた吉田兼好は「40年は長生きしすぎ」（自分は68才まで生きましたがね！）と言っていた。
現代の医学によれば人間の肉体は125年で限界を迎えるそうだが、IPS細胞の研究が進めば死にたくても死ねない時代がやってくるのではないかとドキドキしてしまいます。

ある緩和ケア施設の医師によると、病気になってからあらゆる治療を施した後、やがて死が近づいてきた患者さんは、ほとんどの方が死を受け入れ納得しているそうだが、それを受け入れられない家族は「絶対死ぬのは嫌だ。少しでも長く生きて欲しい」と望む。家族の気持ちを考えれば当たり前かもしれないが、もっと治療を続ければ治ると信じて頑張れ頑張れと言い続ける。
そうすると家族の思いに応えられない患者さんは亡くなる際につらい思いをされるそうだ。
本人が望むことならば、出来れば病院のベッドではなく、旅行に行ったり自宅で家族と過ごしたり、家族や友人に自分のやりたいことを応援してもらった患者さんは「幸せな人生だった」と安心して亡くなっていくと言う。

そんな話を聞くと、生まれた環境は選べないが、死ぬときはある程度自分で選択できるのではなかろうか、と思ったりする。
もちろん全てが順風満帆といった人生でもなかったが、泣いたり笑ったりしながら精一杯生きて、やがてお迎えがやってきた時には**ニコッと笑って「ああ、幸せな人生だった」と言いたい**ものだ。（まだまだ生きますがね！）